



147号
2009/10/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷町 1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
http://wanli.web.infoseek.co.jp/
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



〈着飾った少女達の歓迎は…〉(写真説明16p)

於:中国貴州凱里・南花村(苗族の村) 2004年7月12日

撮影:木村武司

‘わんりい’147号の主な目次

北京雑感(38)「北京の市場Ⅲ」	2
私の調べた四字熟語(36)「盤根錯節」	3
媛媛讲故事(17)「白蛇伝」Ⅲ	4
土の香りのモダンアート③「金山農民画」	6
スリランカ紹介(32)「ジャフナ珍道中Ⅶ」	7
アフリカとの出会い(36)「アフリカンファミリーの姿」	8
中国を読む・番外「知るということ」	9
ラオス・山からだより「G村滞在記」③	10
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より	11
表紙写真の説明	11
私の四川省 一人旅(28) 亜丁⑮	12
10月の歌「蘇州夜曲」の歌詞	14
中秋節の思い出	14
‘わんりい’活動報告・「媛媛の月餅」交流会	15
「媛媛月餅」の作り方	16
わんりい’ 掲示板	16～18

♪「中国語で歌おう!会」9月の歌 ♪

叙情的な懐かしのメロディ
蘇州夜曲 (蘇州夜曲)

良い歌は永遠の命を持っているという証明になるでしょうか。古い歌ですが今もって、ファンの多い歌です。(歌詞 14p)

於:まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田東急裏 109 ファッションビル 7F

10月16日(金) 19:00 ~ 20:30

●指導:趙鳳英 (中国人歌手)

録音機をお持ちの方はご持参下さい。

●「中国で歌おう!会」
11月の講座日:11月20日(金)

*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局 (☎042-734-5100)へお問合せ下さい。(体験無料)

北京に何回も行かれる方はどなたも、街の変化の大きさに驚かれます。1900年代の北京をご存知の方には勿論でしょうが、2000年頃から関わりだした私の目にも、その変貌は驚異的なものに映ります。特に、2000年から3,4年の変化が著しく、昨日まで繁盛していたレストランが立ち退いて、その後大きなホテルが建ったり、今までレンガ塀で囲われていた古い家並が無くなり、突然幅広い道がバイパスとして出現したりと、文字通り目を見張るような変化がありました。環状4号線が中関村大街の下を横切って完成したのもこの頃でした。

私は、1999年春から2001年夏までの2年半、北京にずっと滞在していたのですが、その間の変化は凄まじいもので、一度行ったお店に3ヵ月後に行ってみると、「強制立ち退き」で店は無くなり、辺り一帯の様子がすっかり変わっていると言うことを再三経験しました。

この頃、北京で生まれ育った生粋の北京人の友人に、北京を案内したことがあります。日本に留学して久振りに帰ってきた友人に、新しい道やバスの停留所を教えたり、新しく出来たお店に案内したりと、チョッと得がたい経験を楽しみました。3,4年留守にすると、友人にとって住み慣れた街もすっかり変わって、分からなくなってしまったようでした。

道が出来たりビルが建ったりする変化と同時に、人々の生活も変わりました。大規模なスーパーマーケットが出現する前、人人は市場へ買い物に行っていました。前にもお話ししましたが、この市場は朝早くから活気に溢れていて、野菜や果物はずらりと並んだお店が山のように積み上げていますし、魚は生簀で泳がせて売っています。

中国の人々は、病み上がりの体力回復には生きた魚のスープが有効と信じていて、河や池で釣ってきた魚を香味野菜を入れたたっぷりの水で煮立てて、乳白色になったスープを飲みます。これは疲れが溜まったと感じた時にもしばしば家庭の食卓に上りますが、生きた魚を釣って来られない人人は市場で買い、ビニール袋に入れて持ち帰り、調理寸前まで生かしておくのです。

初めて市場へ行ってビックリしたのは肉屋さんの店先でした。天井から吊るした大きな鉤に架かった肉塊から、部位や量を指定する客の注文に応じて切り分けて売っていました。ひき肉は、木の切り株のようなまな板の上で、大きな中華包丁でリズミカルに叩いて作っていました。豚の脚や頭も並んでいて、思わず身を引いてしまいました。スープを取るための鶏のガラや頭部、脚等も売っていましたが、何故か鶏肉は売っていませんでした。不思議に思いましたが、外の野菜売り場の一角へ行ってその訳が分かりました。

外の売り場で野菜の山が途絶えた辺りに、何羽かの鶏が一塊になってうずくまっていた。みんな生きていたのですが脚を結ばれているので身動きが出来ない状態です。お客はそんな鶏の中から良さそうなを選んで買い求めます。生きていうちに目方を量って値段が決まります。お店の人はすぐに鶏を締めて血を抜き、ドラム缶に沸かしてある湯に2,3分つけます。湯から引き上げた鶏を傍らの洗濯機に入れて脱水ボタンを押します。5分程で洗濯機が止まると中から、すっかり毛がむしられた裸の鶏が出てきます。つまり、中国の人は、生きた鶏をこの方法で売買していました。

田舎や、都市部でも大きなレストランなどでは自家用の鶏を生きたまま運んで自分たちで捌いていました。この一連の作業、文字で紹介するとすごく残酷に思えますが、現場にいると周りの活気に気おされて、感傷に浸る間もなく、唯唯感心して眺めておりました。さすがに、縛られた鶏と目を合わせる事の無いようには気を付けましたが。

因みに、この種の鶏屋さんは街中の商店街にもあって、店頭で鶏が同じように繋がれていました。このお店では鳩も扱っていて、鳥かごに入れて客を待っていました。鳩は心臓病や眩暈に効くと言われて、利用する人は少ないようでした。

ところがある時を境に、市場でも商店街でも、この鶏屋さんが急にいなくなりました。例のサース発生の時、鳥類が病原菌の媒体になるからと当局が生きた鶏の移動を禁止したのです。それに替わって、スーパーで冷凍の鶏肉が扱われるようになりました。初めのうちは一羽丸ごとだけ売っていましたが、暫くするととも肉とか胸肉とか部位毎にも売ようになって便利になりました。

今北京のスーパーでは、鶏肉は部位毎に売ることが多いようですが、日本と違うところは、部位毎に山と積まれた中から、客は自分が必要なだけ袋に入れて、計ってもらって買えること、それと、鶏の頭だけとか脚だけとかも売っていることでしょうか。

利便性を追求してスーパーがもてはやされるのは仕方ないとしても、生鮮食品を扱う市場は存続して欲しいと思います。特に、量り売りの文化は残して欲しいと勝手に願っています。日本でもデパ地下では量り売りを続けていますし、高級志向のスーパーでは新たに量り売りを始めるところも多いと聞いています。北京も日本と同じ道を歩むとしたら、一旦無くなって復活するよりも、今のままの量り売り文化を継続して欲しいと思います。

今頃北京では量り売りの月餅が飛ぶように売られていることでしょう。

盤根錯節は普段あまりお目にかからない成語ですが、調べて見ますと大変含蓄のある内容の成語であることがわかりましたのでご紹介したいと思います。辞書では、

三省堂 大辞林：

「盤根錯節 ①わだかまった根と入り組んだ節。②入り組んでいて解決の困難な事柄」

小学館 中日辞典：

「盘根错节」曲がった根と入り組んだ木の節。込み入った事件または根強い旧勢力のたとえ」

と掲載されています。

この成語の由来は《後漢書^(注1)・虞詡伝》の中の次の部分です。

「志不求易，事不避难，臣之职也。不遇盘根错节，何以别利器乎？」

翻訳：

志は易きを求めず、仕事は困難を避けず。これぞ臣の職也。盤根錯節に遇わずして、何を以ってか鋭利な武器を区別せむ。

意識：

志は高いレベルに置き、困難な仕事も避けて通らない。これが臣として為すべき事なのです。込み入った仕事に携わらないで、何で手腕を発揮できるのですか？

東漢の時代に虞詡という読書家が居りました。彼は早くから父母を失い、小さい時から祖母に育てられました。その祖母が90歳で亡くなった後、李修府(役所名)の大尉に任命されました。

丁度その頃、西羌^(注2)と匈奴^(注3)が国境を侵犯してきて、北方の并州(現在の山西省の大部分と河北省、内モンゴル自治区の一部地域)と西方の涼州(現在の甘粛省の一部地域)をおびやかしました。時の大將軍の鄧鷺は涼州は放棄し、兵力を集中して并州を守ろうと主張し、大方の人たちもそれが良いと思っていました。

只虞詡だけは皆の考えに付和雷同せず涼州は見捨てるべきではない、もし涼州の守りを諦めたら全体の形勢が不利になってしまうと主張しました。

この時から鄧鷺は虞詡に対して反感を抱き、機会があったら報復攻撃してやろうと狙っていました。

その後間もなく、朝歌(都市名)で民衆と地主が武装して朝廷に対抗する事件が発生し、多くの官吏が殺されました。朝廷は何度も派兵して鎮圧を試みましたが、鎮めることができませんでした。

鄧鷺はこの事件にかこつけて適当な口実を見つけ、虞詡を朝歌の県令に派遣してしまいました。

この機会に乗じて虞詡をやっつけようと思ったのです。虞詡の親しい友人たちは皆彼のことを心配しましたが、虞詡はむしろ逆に自信を持って言いました。

「志を高く持っていて気概の有る人は、絶対に困難な仕事を避けたり、容易な仕事ばかりを探したりするはずが無い。そんなことでは己の手腕を発揮する場が無いからだ。このことは私達が樹を切るときに、もし硬く堅固で曲がった根や入り組んだ木の節に出会うことがなければ、斧の切れ味の良さを示すことができないのと同じことだ」

虞詡は朝歌に赴任後、彼の統治能力を十分に発揮して、その地の官民間の争いを遂に平定しました。朝廷はこのことを大変評価して、彼を武都太守(官名)に昇格させました。

■注記

1. 後漢書(ごかんじょ)：中国後漢朝について書かれた歴史書。二十四史の一つ。本紀十卷、列伝八十卷、志三十巻の全百二十巻からなる紀伝体。成立は5世紀南北朝時代の南朝宋の時代で編者は范曄(398～446年)。
2. 西羌：羌族は、中国西北部のチベット系民族。タンゲート、蔵人、番子などとも呼ばれる。主要な使用言語は中国語と羌語。漢代には西羌と呼ばれ、時に漢の涼州に進入したりした。
3. 匈奴：前3世紀末から後1世紀末にかけて、モンゴル高原を中心に活躍した遊牧騎馬民族。秦代末の前209年、冒頓が単于(君主)となり、北アジア最初の遊牧国家を建設。東胡、大月氏を征圧し全盛となり、漢にも侵入したが、漢の武帝の遠征と内紛により、東西に分裂し、後48年さらに南北に分裂。南匈奴は漢に服属し、北匈奴は91年漢に討たれた。人種的にはトルコ系説が有力。西方に移動した子孫がフン族であるといわれる。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア』より抜粋

盤根錯節(ばんこんさくせつ)

三澤 統

私が調べた四字熟語 36

しばらくして白娘子が目を覚まし、許仙が気を失って倒れている姿を目にして、驚くとともに悔しくてたまりません。が、先ずは許仙の命をなんとかしてでも救わなければと南極仙翁の瑞草園を思い出し、急いで南極仙翁の住む蒿山hāo shānに行きました。蒿山には「九死還魂仙草」(靈芝草)という薬草が生えていて、それを煎じて飲ませると死んだ人でも生き返らせることができるのです。

しかし、鶴童と鹿童という番人がその仙草を摘み取られないようしっかりと見張っています。白娘子がまさに仙草を摘み取ろうとした時、彼らに発見されてしまいました。白娘子は二人と激しい格闘の末、どうにか仙草を持ち帰ってきました。

白娘子が、やっとの思いで摘んできた靈芝草を煎じて許仙に飲ませると、許仙はその仙草の薬効で一命を取り留めることができました。けれどもそれでは法海坊主の気持ちがおさまりません。白娘子が外出した際、許仙を騙して連れ出し、白娘子と許仙の縁を切り裂きたいと

「早く妻を殺しなさい。私の云う通りにしないと、あなたの命はないぞ!」

と脅しました。しかし、白娘子の必死の看護で蘇った許仙はもう法海の脅しには屈しませんでした。「妻はたとえ白蛇であろうとも私の妻だ。彼女が私の命を救わなかったら、私は今ここにいるものか!?! しかも彼女のお腹には私達の子がいるのだ。私はもう決して彼女を裏切るようなことをしないと心を決めたのだ」

法海は許仙を金山寺へ無理やり連れて行くと禅房に幽閉してしまいました。

白娘子と小青はあちらこちらと許仙を探しましたがどうしても見つけられずにいましたが、やがて法海に誘

拐されたと知りました。二人は金山寺に赴くと許仙を返してくれるように法海に頼みました。しかし法海はその頼みに全く耳を貸さず、如来佛から盗んできた禅杖を使い白娘子に戦いを挑むのでした。白娘子の、身重の身では到底勝てる筈がありません。

白娘子と小青は水の妖怪たちに頼み込み、法海の住む金山寺を水浸しにしようと思いました。けれども水位

が上がれば、寺の位置も高くなり、なかなか勝負が付きません。白娘子と小青は最後の技とばかりに天にも届く水嵩にしました。けれども寺がまさに水没するかとみると、法海は如来佛から盗んできた袈裟を取り寺の玄関で一振りしました。袈裟は眩いばかりの金の光を四方に放ち、見れば高くて長い堤防が現れたではありませんか。水は長堤の向こうに押しやられ、今にも水に呑み込まれるかと思えた寺は守られてしまいました。

許仙を救い出す他の方法がないかと白娘子と小青が考えを巡らせているうちに、白娘子が産気づき二人は急いで西湖の断桥へ帰りました。そして、間もなく男の子が生まれ許仕麟と名づけられました。

幾日か過ぎ、思いもよらないことに、許仙が突然現れました。実は、許仙は法海と白娘子たちとの戦いのどさくさにまぎれて逃げ出していたのです。自分の子を初めて見た許仙は白娘子に感謝の気持ちでいっぱいでした。子ども加えて4人になった許仙と白娘子、そして小青はこれまで以上に幸せな生活を送ろうと誓い合いました。

しかし、その生活を続けることはできませんでした。間もなく新年を迎えようというある日、新年に使うものをこまごまと取り揃えた雑貨売りが門の前にやって来ました。雑貨の中にきらきらと光る綺麗な金の冠があり許仙の目を惹きました。雑貨売りは許仙に「綺麗な



冠でしょう？奥さんにプレゼントしてあげたらきっと喜ばれますよ」と言葉巧みに薦めました。「そうだ。妻はこれまでいろいろ苦労して来た。褒美に買ってあげよう」許仙は考えてそれを買いました。

翌朝、白娘子が化粧しているところを見かけた許仙は、ビックリさせて喜ばそうとこっそりと白娘子の後ろに近づいてその金の冠を白娘子の頭にそっと被せました。ところが冠を被せた途端、白娘子はきりきりと強烈な痛みで頭を締め付けられ、冠を脱ごうとしても取れなくなりました。

実は、雑貨売りは法海で、この冠は法海が如来佛のところから盗んできた金の鉢を冠に変えたものだったのです。この金の鉢には恐ろしい魔力があり、被せられると鉢の中に閉じ込められてしまいどうしても逃げ出せなくなるのです。許仙は驚き慌て何とか取り外そうとしている所へ法海が入って来ました。

「わはは、今日、わしはやっと妖怪を捕えたぞ!」と言うと白娘子の頭の冠に息を吹き掛けました。冠は大きなぴかぴか光る金の鉢に変わり、白娘子はその中に閉じ込められてしまいました。許仙と小青は怒りのあまり法海に立ち向かおうという時、白娘子は金の鉢の中から言いました。

「小青、あなたの今の力では法海に勝てません。早く逃げて、もっと修行を積んでから私を救いに来なさい。そして旦那様、お願いします。早く息子を何処かに連れて行ってしっかり育ててください!」

小青は白娘子の言葉を聞くや青い煙に変わるとどこかに去って行きました。人間でしかない許仙は法海に立ち向かう術もなく、息子を抱いて白娘子に見せると、急いで立ち去るしかありませんでした。金の鉢に閉じ込められた白娘子が悲しさと悔しさに涙を流している間に、体はどんどん小さくなり、遂には白蛇の姿に戻り、そして、白娘子を閉じ込めた鉢は法海によって西湖の辺に立つ雷峰塔の下に鎮められました。



長い歳月が経ちました。小青は大山に閉じこもって、何十年もの修行を積み無敵の身となりました。許仕麟も許仙の元で大切に育てられ、立派な青年に成長しました。

ある日、許仙と、許仙と白娘子の二人の息子である許仕麟の親子は小青に伴われ、白娘子が閉じ込められた雷峰塔を訪れました。そして小青は霊峰塔を燃やし

白娘子を救い出し、妻と夫とその子はようやく再会を果たすことが出来ました。

しかし、それは法海が許しません。怒った法海は小青と三日間戦い続け、とうとう如来佛の居眠りを妨げてしまいました。如来佛は目を覚ますと、如来佛の三つの宝物である「金の鉢」、「袈裟」、「禅杖」が盗まれているのに気付きました。騒がしい下界を良く見ると、なんと法海がそれを持って小青と戦っているではありませんか。

如来佛は怒って手を振ると三つの宝物が舞い戻ってきました。もともと法海は修行が十分ではなく、宝物が無ければ改めて修行に励んで力をつけた小青に勝てる筈はなく、結局西湖の底に逃げて、蟹のお腹へ隠れてしまいました。

許仙一家は、その後幸せな生活を送り続け、息子の許仕麟は、許仙と白娘子の愛に守られ、良い教育を受けて優秀な成績で科挙に合格し、役人を務めるようになったということです。

＊あとかきとして＊

中国の人々に好まれる物語では家族の愛情や絆がいかなるものにも打ち勝つということが重要な要素になっています。この物語では、最終的には白蛇の妖怪が勝つことになるのですが、それは家族愛というテーマで正当化されます。

実は、小青は物語の始めの方で悪徳役人から金を盗み、その金を元に許仙は薬屋を開くのですが、そのことへの罪悪感はありません。中国の民衆には民から奪って金銭を溜め込んでいるような悪党から盗むことは「悪」ではないという考え方もあるのでしょうか。

ところで端午の節句には白蛇伝の物語にありますように、中国の人々は魔よけとして雄黄酒を飲みます。この酒には微量ながら砒素を含む鉱物がかつては使ってたようですが現代の人々が飲むのは似せて作った酒のようです。(何媛媛)

【'わんりい'の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報「わんりい」は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

＊紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

1972年、当時海軍の文化団に所属していた^{ウートンジャン}呉彤章は、上司に絵の腕を見込まれ上海の金山区へと派遣されました。陝西省戸県で盛んになった農民画を、金山の地でも同様に組織づくるという任務のためでした。

当時40歳だった彼は金山の農家を一軒一軒巡り、才華ある農民を見つけようしました。彼は新しい時代の農民画を創る可能性を探っていました。やがて彼が選んでいった金山農民画の描き手は、その大部分が剪纸紙や刺繍の得意な老婦人でした。

呉彤章がトライしたこと、それは、長い年月を経て金山の地に伝承されてきた民間芸術を農民画という新しい形態の芸術に蘇らせることでした。果たして、彼の意図は数年後に見事に花開くこととなります。

私がここで注目したいのは、彼の指導法です。

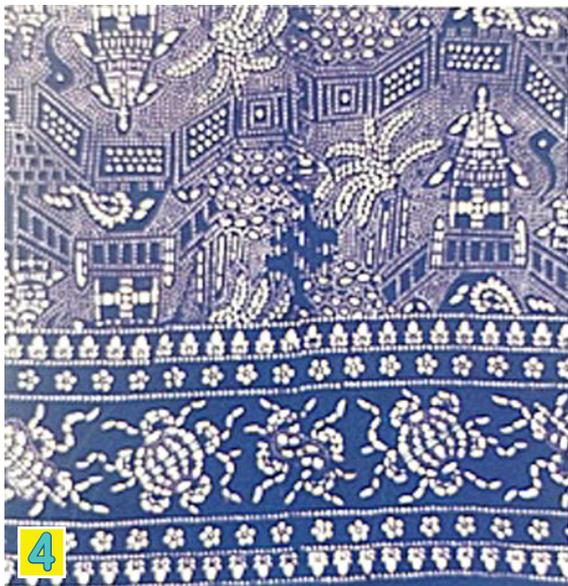
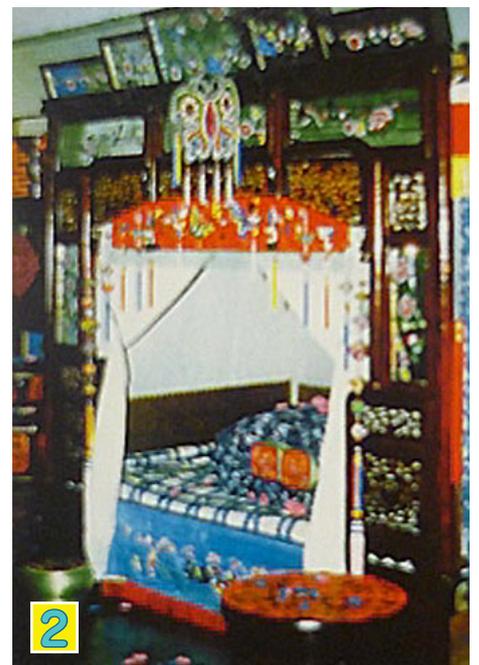
呉彤章はこんなことを語ったそうです。「彼らの酒瓶にはすでにうまい酒が満ちている。自分はただその瓶のふたを抜き、トクトクッと注げばいいだけだ。自分の酒を彼らの瓶に注ぐ必要はない」

実際に、2009年夏に私が金山で出会った^{ジャンプウ}盛璞画師は当時の呉彤章の指導を振り返ってこう言っていました。

「呉老師は学校の授業のような教え方は決してしなかった。我々に自由に好きなように描きたい絵を描かせ、その後、その絵に対して『ここに

鳥を足したらどうか、この川の色は違う色にしたらどうなるだろう?』などと、提案をする方法をとっていた」

彼の、揚子江が運んだ肥沃な土が生んだ文化とそれを継承してきた人たちの敬う気持ちが、金山農民画の特別なスタイルを創っていったのです。解き放たれた小鳥のように自由に楽しく絵を描くことを許された農民たちの、美しい理想や素朴ながらも心豊かな日々が存分に表現された絵は、土の香りのする生活を忘れかけた私たちに、何か大切なことを思い出させてくれます。



写真説明： 江南地区（揚子江下流）の生活に根ざした芸術品。右上から、①かまどの壁画、②新郎新婦の部屋。左側上から、③青く絵付けされた陶器、④藍染、⑤刺繍

今回はLTTEチェックポイントの門限に遅れたシンハラ人達が、ゲートの前に集まって相談を始めたところで終わりました。

僕は相談に加わっても仕方が無いので、チェックポイントの周辺をウロウロしながら周囲の様子を眺めたり、遅れて着いた人達の乗ってきた車を見たりしていました。裕福な人も混ざっているようで外国製の高級車が何台か混ざっています。相談に加わっていたシンハラ人達が、僕の方をチラチラ見ながら何か声高に氣勢を揚げ始めました。このような状況では碌な事が無いのは過去の経験から判っています、とても悪い予感がしました。

友人のカルナラトネ君とチャミンドラー君が集まっていたシンハラ人達に促されて僕の方に歩いてきます。二人は僕の気質を知っているだけに困ったような顔をしています。そして、遅刻した人を代表してゲートを開けるようにLTTE側と交渉してくれないかと切り出してきました。

外国人だからLTTEも便宜を図ってくれるだろうと云うのです。僕は、前もって判っていたルールを破ったのだからペナルティーを受けるのは当然だとして交渉役を断りました。

シンハラ人達の不安な気持ちは理解できますが、敢えて断った理由は、僕は外国人だと言う事で特権を持っているとは思っていないし(スリランカだけでなく開発途上国で仕事をしている人の中には、外国人だというだけで特権を持っていると勘違いしている人が多くいます。現地の人達もそれを是認しています)、LTTEのキャンプを見たいという気持ちが強かった為でした。二人の友人は、やっぱり断られたかという顔をしてシンハラ人達の処へ戻っていきました。

待っていたシンハラ人達は断られたと聞いて驚いています。僕がLTTEのキャンプに行く事を恐れて外国人の特権を使ってLTTEと交渉してくれると考えていた様です。

再びシンハラ人達の議論が始まりました。今度は友人二人と共に身なりの良い数人のシンハラ人がやってきました。外国製の高級車に乗ってきた人なのでしょう。そして、自分は10数年ぶりに移民先のニュージーランドから帰って来た、両親や親戚一同が集まって待っている。友人が入院しているので見舞いに行きたい。重要な商談がある。等々、色々な理由を口にし、口利き料を払ってもいいので自分達の代表として交渉してくれと言いました。

ほとんどが出任せなのは判っています。何故かという、陸路はやっと通行できるようになりましたが、空路はかなり前から民間航空会社によって確保されていました。海外の移民先から帰って来る事が出来るほど成功した人や、重要な商談のある様なビジネスマンは空路を使えば1時間そこそこでコロomboからジャフナに行けます。僕に報酬を払ってもいいと言うくらいですから、この人達はルールを破っても簡単にお金で解決できると考えている類の人達です。こんな人達の代表なんて絶対に嫌だと思い、再び交渉役になる事を断りました。

遅れてきた人達の車が駐車している場所に近づいてみると、相談に加わらなかった男性やご婦人、子供達の他に臨月間近と思われるほどお腹の大きな妊婦さんがいました。ここまでのガタガタ道をよく我慢してやってきたものだと感じて見ていると、妊婦の旦那さんが僕の視線に気がついたようでぼくの処にやってきました。

お産の為にジャフナの実家に戻る途中だそうで、制限時間は判っていたが道がこんなに悪いとは知らずに車で来てしまい、妊婦さんの体に悪いと思ってスピードをあげられなかったと言うのです。既にLTTEのキャンプの様子を見に行ってきたそうで、簡易宿舎には電気もなくベッドは板張りで薄いマットがあるだけだったそうです。自分が悪いのだからペナルティーを受けるのは仕方が無いが妻の体が心配だと言っていました。

先程の人達の為にLTTEと交渉する気にはなれませんが、妊婦さんや子供達の為に交渉してみようと思い始めました。ただし、全員ではなく弱い立場の人だけで先程の人達は当然キャンプ泊まりで構わないと思っていました。

ゲートの脇に立っていた兵士に話し掛けてみましたが英語が通じません。カルナラトネ君に通訳を頼んで、チェックポイントの責任者と話がしたい事を伝えてもらいました。兵士は直ぐに事務所に行って、責任者と思われる人と一緒に戻ってきました。責任者は若い人で30代そこそこに見え、英語が通じました。案ずるより生むが易いです。

交渉などという難しい話にはならず、事情を説明すると直ぐに妊婦と子供がいる家族はゲートを通して良い事になりました。最初から声高に詰め寄ったり、賄賂を渡そうとしなければシンハラ人が交渉しても同じ結果を得られたと思います。ただし、この先にある赤十字と政府軍チェックポイント双方の責任者の同意を得ることが出来たらという条件付です。

(続く)

歳を重ねてゆくほどに人は尊敬されるのは当たり前のことと私は思うが、アフリカ諸国はそのことを誰も言わなくともそれが当たり前な社会のようだ。

人が途上国と呼ぶアフリカの国々では、人々に尊敬され、大切にされている老人が多いように思う。私が知るケニアも例外ではなかった。例えば、ケニア最大部族のキクユ族では、おじいちゃんは「グーカー」と呼ばれ、おばあちゃんは「ショウショウ」と呼ばれるが、その言葉のニュアンスには私達日本人が、おじいちゃん・おばあちゃんと呼び掛ける以上の尊敬の響きを持っているように思う。

植民地支配から国が独立して40～50年しか経過していないほとんどのアフリカの国々にとって祖父母の世代は、独立を勝ち取った世代であり、歴史の生きた証人でもある。また祖父母世代の数世代前になると、まさに植民地支配の下で実際に生きていた世代なのだ。祖父母の話には、植民地時代のアフリカの人々の苦しみや悲しい経験が今も息づいている。

夫の父方の義理の祖父は、ケニアがまだイギリスの植民地時代だった時に、白人入植者の畑で働いた経験を持っている。その後のケニア独立戦争では、マオマオ（独立のために戦った戦士の総称）の一員として戦ったそうだ。その後は現在までずっと、自分で始めたコーヒー農場でコーヒー豆を栽培し、出荷している。私が初めて会ったときも、コーヒー農場で仕事をしていた。キクユ語で「こんにちは」というと笑顔で迎えてくれた気がする。「今日は体調がよくなくて、コーヒーの実を少しずつはさみで摘み取るしかできないよ」と言っていた。

その祖父は、おしゃべりな人である。所かまわず、相手が誰であっても、ずっと話をし続けている。私がキクユ語を理解できないと知りつつも機関銃のように話し続けるのが常だ。私が周りの人に「祖父は何を話しているの」と訊くと、昔話、諺の由来、農作物のこと、家族のこと、植民地時代のケニアでマオマオ戦士だった頃のことなど、いろいろな話が後から後から続いているそうだ。あまりのスピードに誰も合の手さえ入れることができない。対照的に祖母はもの静か

で聴き上手だ。たまに一言二言口を挟んでは、祖父に倍くらい反論されている。

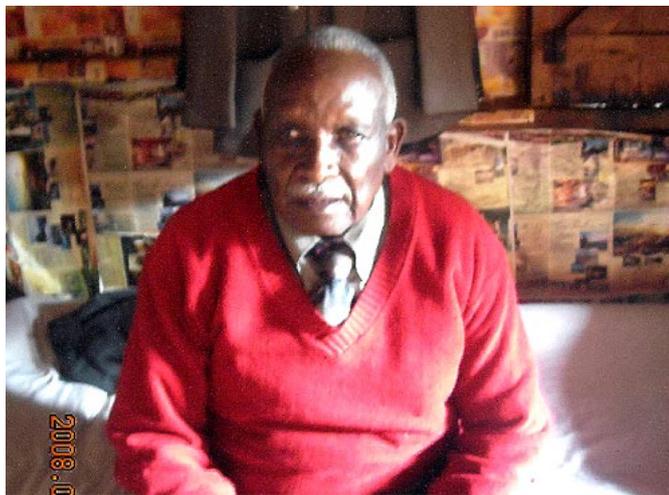
オザヤという村に住む母方の義理の祖父は、耳も遠く、足も弱って杖を突いて歩いている。また父方の祖父は、80歳を越えているが、1人目の奥さんとの間に15人の子供があり、2人目との奥さんとの間には10人の子供がいるが、この奥さんは60代でまだまだ若い。2人の奥さんは、本当に仲良しで、家も同じ敷地内にある。奥さん達の家が同じ敷地内にあるのはこのあたりでは一般的だが、この祖父の奥さん達の、それぞれの子供達は敷地内を自由に行き来していて、私のように外から来たものには、だれがどちらの子供か分からない。「そんなことは重要ではない」と祖父は言っていた。「だってみんな私の家族だから」だそうだ。

1人目の奥さんは、私がケニアに滞在していた2007年に亡くなった。糖尿病であった。病に倒れてからは、ナイロビの病院に入院したり、通院したりしていた。私が自分の孫と結婚するのを知ると「孫が結婚するのが嬉しい」といって心から喜んでくれていた。キクユ族は伝統を大切にしている民族といわれ、しかも日本人なんて今まで見る機会などなかった世代の農村の祖母である。亡くなる半年前に見舞いで訪れた私の手をとって、「孫の結婚が嬉しい」と涙を流してくれた。

葬儀の為に、棺に納められた祖母はナイロビの病院からオザヤ村に車で運ばれた。村に入ると村中の人々が、彼女を迎える歌を歌い始め、その後ろの車に乗っていた私はその人の多さにびっくりし、またその歌声の大きさに村の人々の彼女への愛情の深さを感じた。

200名は参列していただろうか。棺を前に神父さんが式を進めていく。彼女の家族が次々に紹介されて棺を囲み写真を撮る。その多さ。こんなにも大勢の家族がいたということを知った。きっと私は彼女のにとって最後の新しい家族だったのだろうなと思った。

「人の死は悲しみの日」と思っていた私は、「土に帰る喜び」、「神様の許に行く喜び」、「人生をこんなに



100人を越す家族の長・グカー

も多くの人によって愛された喜び」の歌を聴き踊りを見ながら、亡くなった人の視点で「人の死は喜びの日」でもあることを学んだ。彼女が生み出した命は、このように増え、まさに「アフリカンファミリー」を作っていた。祖母の大勢の家族を目前にして「女性は命を生み、命を育む性である」ことをしみじみ感じた。

当時、ケニアの人から見ると私は既に結構な年齢

だったが子供が居なかった。私は「子供を持つ」ということは人生の「選択肢の一つ」としか考えていなかったが、ほとんどの女性が結婚し子どもを生むケニアで、ケニアの人たちはそんな私をどのように見ているのだろうと思ったりもした。

ケニアの女性は、お母さんになると、長男の名前にママをつけて呼ばれる。長男の名前がジョーとすると、「ママ・ジョー」と呼ばれる。ちょうど日本でも、「～ちゃんのママ」と呼ばれるのと同じだ。違うのは村人全員にそう呼ばれることである。ケニアでママと呼ばれることは名誉なことだ。その家族を養い、育む存在。しかも大家族だ。だからこそ、アフリカンママは尊敬されている。

「人は生まれ、育まれ、社会に生き、社会に貢献し、尊敬をもって死を迎える」。考えて見れば当たり前のことが繰り返されたその結果現代の私たちが存在しているのだ。人類発祥の地といわれるアフリカではこうしてずっと大家族の絆が続いている。

中国を読む(62) 番外 「自分が『知る』ということの『何か』とは」／この頃私が思うこと

8月29日土曜日。居酒屋で翌日の選挙の話をしていたら、飲んでいるなかの1人に「私、選挙権ないんだよね」と言われた。飲んでいたほかの4人の視線が、一気に彼女に集まった。彼女は在日韓国人の2世だという。

別の1人が、「でも、選挙権って帰化すればもらえるでしょ?」と普通に言うので、彼女が何か言葉を発しようとしていたにもかかわらず、私が熱くなってしまった。「彼女には彼女のコミュニティがあって、文化があって、国があって、そういうものがあるって、彼女がいるわけでしょ。簡単に日本に帰化するなんてできないでしょ」。

「帰化」という言葉を発したのは、人を傷つけることのない、とても優しい男友達だ。彼女が静かに言った。「例えば、お盆でも、うちでは韓国の風習をするんだよね。日本に生まれて日本に育っているけど、完璧に日本人ではないし、日本人にはなれないと思うよね」。

「知る」ということが大切だとリアルに感じたこと

は、正直、今までなかった。「知る」ことが大切なのは分かっているけど、「知る」だけでなにかが変わるとは思っていなかった。けれど、簡単に「帰化」という言葉を発せずに済んだのは、ささやかだけれど、自分が「知る」ことで得た「何か」のおかげだった。「わんりい」の書評がなければ、読むことのなかった本が教えてくれたことだ。

私自身も、学生時代に台湾人の友人に中国についていろいろと聞いて、その場にいた別の友人に後で「はらはらした」と言われたことがあった。自覚はなかったが、台湾≒中国というような聞き方をしていたらしい。「知らない」とは、そういうことだ。

彼女とは、選挙前日のその日が初対面だった。彼女を紹介してくれた友人の話によると、大学入学時にも、自分が在日韓国人だと自己紹介したそう。きっと、それが彼女の姿勢なのだと思う。日本にいるからこそ、自分が韓国人だと意識せざるを得ない。日本にいる日本人の私には知りえない、リアルにここは窮屈な国なのかもしれない。 (真中智子)

🌀3月12日(木) 成人学級に思う

シェンは成人学級に行っている。1か月ほど前から、読み書き計算のできない村人が集められて、教えてもらっているのだ。40～50人も生徒がいるらしい。毎朝、7～8時、小学校で勉強している。

「強制よ。そうじゃなかったら、今さら、誰も勉強なんかしないわ」と言う。

それだけでなく忙しい朝の時間を、いい大人が、ラオス語と算数を毎日、小学生の机に座ってべんきょうするのは大変だろう・・・と思う。「全然、頭に入らないのよ。仕方ないから行っているけど、まるでわかっていないの」と言う。確かに、彼女のノートを見たら、少々唖然として、心が苦しくなった。ミミズが這ったような文字、確かにこれじゃ何もわかっていない。大人になってから勉強するということは、こんなに大変なのか・・・と、少し胸が痛くなる思いがした。

計算も恐ろしく基本がわかっていない。15-7とかになるとわからない。15個お菓子があって、7つ食べたらいくつ残る?と聞くと、とんでもない答えが返ってきたりする。「それが難しかったら、15は、10と5に分けて、10から7を引いて、5を足すのよ・・・」と言うけれど、あまりよくわからない。2年生のトゥーローとどっこいである。このシェンがである。彼女はとてもしっかりしていて、このサイガウ家で、生活面では、一家の大黒柱ともいえる彼女がである。

小さい頃に勉強する・・・ということ、きっと脳のあたる部分が鍛えられるのだろう。そうでないと、その部分が回らない・・・のかもしれない・・・

昨夜、ニア・ゾンブーとシェンに算数を教えた。宿題を教えてください・・・というので、見たら、 $900-543$ とか、 $245+367$ とかその手の計算である。これは難しいよな・・・とか思いながら説明していたわけであるが、ふっと気がつくと、彼らは、9と90と900がどう違うのか、それもわかっていなかった。えっ?と思ひ、1から、100まで全部数字を書いて読んでみた。「え～そうなの?はじめて知った」と言う。彼らは、今回の授業ではじめて、1、2、3、・・・という数字の書き方を教わったのである。

でも、まだ100も1000もわかっていない。えっ?じゃあ、これまでお札はどうやってわかっていたの

か?と思うけれど、結局、形態でわかっただけである。10と100の区別がつかない。彼女たちは、こんな引き算をするレベルではなく・・・この引き算、足し算の計算はまだ無理と思う。

そうかあ、そこまでわかっていないのか・・・と私は唖然とした。

「先生は、もうあきれていて、飽きて、外でたばこ吸ってんのよ」と言うけれど、この彼らを教えるのは、子どもを教えるのとはわけが違うのである。ラオス語でべらべらと説明するだけじゃだめなのに・・・と思う。

ニア・ゾンブーは、あのやさしい、ちょっとさびしい笑いを浮かべながら、

「畑仕事だったらできるのよ。力いっぱいやればいだけだからね・・・でも、これはもう頭がねえ・・・受け付けられないのよ」

と言う。

これまでに彼女たちが、どれだけの「引け目」を感じながら生きてきたか・・・と思う。今の世の中で、ひとつも文字や数字がわからないことが、やはり彼女たちに、どれだけの「引け目」を感じさせてきたか・・・と。

もちろん、少し前まで、村の普通の生活の中では、数字もラオス語もいらなかったのであるから、それを引け目と感ずることは、ないわけなのだが・・・でも、やはり、これから、今の現状の世の中では、基礎学力というものは必要だし、それは、柔軟な頭の、子ども時代に身につけておかないと大変なのである。

トゥーローがシェンに訊く。「小さい時に勉強しなかったの?」シェンは悪びれずに「そうよ。だから、今、あんたに勉強しなさいって言っているのよ。大人になってからじゃあ、本当に大変なのよ」と言った。本心だろう。

人の価値というのは、勉強ができるとかできないとか、そんなことではない。もちろん、私は、そう思っている。シェンやニア・ゾンブーに対して私は、尊敬の念を持っている。彼女たちが、字が書けようが、計算ができようができまいが、そんなことでは変わらないのである。ただ今回、彼女たちに勉強を教えることとなり、私が大好きで尊敬する彼女たちだから故に、余計に、いろいろと思うことがあった。私にとっても貴重な体験であった。

yú qíng cán xīn
松本杏花さんの俳句「余情残心」より

結び上げし黒髪の艶雁来紅

dǎjié wǎng shàng juǎn
打结往上卷
niǎo hēi xiùfà liàngshǎnshǎn
鸟黑秀发亮闪闪
yàn lái hóng jiāoyàn
雁来红娇艳

季语：雁来红、秋。该花为苋科一年生草本植物、高一至二米。叶长方形、于初秋变黄、

十分鲜艳。开淡绿色小花、不宜移植。原产印度。因大雁飞来时叶子变红、故名。亦称“鸡冠花”而取名的把！因鸡冠花花红如鸡冠、而雁来红则叶红似鸡冠。

赏析：此首为作者参观我国苗寨时所作。作者将苗族女性的发式与鲜艳夺目的雁来红媲美、构思奇拔、妙趣横生、咀嚼时令人不觉莞尔。

色鳥や苗族にある相聞歌

cǎi niǎo piānpiān lè
彩鸟翩翩乐
miáo zú guī bǎo hé qí duō
苗族瑰宝何其多
yōu yáng xiāng wén gē
悠扬相闻歌

季语：彩鸟、秋。彩鸟主要指色彩鲜艳的候鸟、故属秋。

赏析：日本的相闻歌与其传统诗体杂歌、挽歌相并列、为《万叶集》的三大类别之一、以亲友之间相互曾大赠答和歌为主。恋歌占绝大多数、后来只指恋歌。

艳丽的候鸟相互追逐、使秋色斑斓的层林活跃起来。作者对蕴藏于苗族的文化瑰宝深感兴趣、特别是那对唱的恋歌、更是情有独钟。鸟鸣幽山、青年男女对歌相恋、构成了一个“万类霜天竞自由”的世界、令人陶醉！

【表紙写真について】

僕は男だから若い女性からお酒を勧められれば嬉しい。それも中国の少数民族のキンキラキンの冠をかぶり、各自がデザインしたカラフルで美しい模様の衣服を着たお嬢さん方から、「お酒をどうぞ」などと迎えられると、それだけでも天国にでもいるような最高の気分だ。

それは中国の少数民族の苗族の住む村を訪問した時のことである。どの様な人たちとの出会いがらうかと、期待に胸を躍らせて村に続く石畳の坂道を登っていくと、村の入り口に屋根付きの門があり、彼女たちが歓迎のお酒を振舞おうと待ち構えている。それがここの習慣なのだ。もういいと断るまでお酒をついでくれる。目の前の美女からお酒（中国の白酒）をついでもらおうと、写真撮影の目的を忘れそうになるほど幸せな気分になる。またそのお酒が地酒なのかうまい！太陽が高い真っ昼間からのただ酒というより、日本ではこの様な雰囲気味わえるチャンスは皆無である。

もう一杯と杯を出すと、私の脇から冷たい視線を感じた。ふと我に返って、最高の気分写真を撮らせてもらった。

【二人の少女】村民達は村で唯一平坦な広場で、私達のために、子供から大人まで、男女を問わず歓迎の踊りを披露してくれた。上の写真は少女達の踊りが終わった後、椅子



二人の少女

で休んでいる所を撮影させてもらった。

少女達の民族衣装と、彼女たちの素直な目に心を引かれた。都会から離れた大自然の中で生活していると、心の素直さが若い彼女たちの目に現れて来るものと思った。

ちなみにこの村の男性達は、日本の昔の和服の様な衣装を着ていて素朴なものだった。しかし残念なことに男性に向けてシャッターを切る機会は多くなかった。（木村武司）



苗族の剪紙

翌朝目が覚めると、太陽は既に高く登っていた。歩き詰めだったこの2日間、早朝3時に起きて稻城を出た翌日は、洛絨牛場の物置小屋で寒さに震えながら浅い睡眠をとっただけだ。久しぶり(?)に、暖かい布団にくるまりグッスリ眠れた余韻にひたりながら、じんわりと昨日の疲れが残る身体を起こすと同宿だった他の宿泊客達は皆出払ってしまった後だった。

ガラんとした部屋の中で、私は暫くの間所在なくボンヤリとしていた。この一人旅が始まった時から最大の目的にしていた宝石の湖探訪がってしまったこの朝は、どこか旅の目標を見失ったような気が抜けた気分になっていた。今日は何をして過ごそう……。とりあえず思い浮かぶのは沖古寺の近くに美しい湖があるという景勝地「^{チンジュハイ}珍珠海」だが、どんよりと曇った空からは時折小雨がパラついていた。

こんなお天気ではいそいそと出かける気にもなれず、部屋に置いてあった魔法瓶のお湯にタオルを浸して身体を拭くと、少しスッキリした気分になってきた。今日の予定が沖古寺から歩いて小一時間程だという珍珠海に行くだけなら慌てる必要は無い。亜丁で過ごす時間はたっぷりあるのだ。雨がやむのを待ちながら荷物の整理をしていると、昨夜の食堂で私が汁麺を食べている時から見かけていた、ここの宿主夫婦の一人娘らしい少女がソロ〜とやって来て部屋の中を覗き込み、私と目が合うと逃げ去った。

およそ3、4歳といった年頃だろう、チベット族には珍しく思える色白のお人形のように可愛らしい女の子で、ちょっと我儘そうな顔立ちときれいな服がいかに裕福な家庭で大事にされているお嬢様の雰囲気だ。地面と見分けのつかないほど泥にまみれた、山の生えてきたばかりのキノコのようなこの辺りの子供達とは明らかに一線を画している。少女の顔を見ていると、ここの宿主夫婦はチベット族ではなく漢民族なのかもしれないなと感じられた。そう思えば彼らのわかり易い強欲さ加減にも納得がいく気がした。

見慣れぬ異邦人の私に子供らしい興味を抱いたのか、先程逃げ去った少女は暫くするとまたコソ〜とやって来て部屋を覗いては逃げていく。雨で出かける気にもなれずに退屈しかけていた私も段々楽しくなってきた。ザックの中にしまっぴなしになっていた折り紙を取り出し、再びやって来た少女に見せてから折り始めた。

少し離れた場所で何が始まるのかと息を詰めて覗き込んでいる少女に折り鶴を折って差し出すと、嬉しそうにそ

れを持って逃げて行き、案の定しばらくすると再び戻ってくる。全く世界中の何処に行っても子供のやる事は同じだ。行ったり来たりしている少女に思いつくまま色々な物を折ってあげているうちに、打ち解けてそばに寄ってきた少女は、折り紙の包装紙の裏側に書かれていた馬の作り方を見つけると「これを作って」というように指差してみせた。

なるほど亜丁の子供にとって馬は一番身近な動物だ。外国語で書かれた折り紙のイラストでもピンとくるものがあつたのだろう。説明書きと睨めっこしながら苦心して作った馬は、折り紙2枚を使用し胴体と頭の部分を別々に折ってから、それらをつなげる凝った作りで、なかなかリアルだった。折りあがった紙の馬に少女は歓声をあげるとそれを持って母屋の方に消えていった。少女に折り紙を折っているうちに、いつしか雨はあがって空には薄日が差していた。

太陽の光って素晴らしい。先程まで曇り空の下、気だるい気分でもボンヤリしていた私もお日様に照らされた地面を見てるとまたワクワクして動き出したい気持ちが甦ってくる。さあ、まだ見ていない場所の亜丁探検に出かけなくっちゃ!!

ハイキング用の小さいザックに飲料水や雨合羽、携帯食料詰め込んで母屋の方に出て行くと、先程の少女が入り口のテラスに折り紙をいっぱい並べて遊んでいた。ヒヒーン! パカパカパカ……

口で馬の鳴き声を真似ながら折り紙の馬に跨っている娘の様子に、宿の親父が相好を崩しながらやって来て「小姐!これはあんたが作ったのかい!? 上手いもんだ。彼女は馬がお気に入りだよ」

と父親の笑顔を見せていたかと思うと、おもむろに揉み手の商人の顔に早変わりして

「ところで、食事は如何かな?何かちょっと食べていけよ」

と私の顔を覗きこみニヤニヤして見せた。まったくその変わり身の早さと商魂の逞しさには脱帽だ。私は思わず吹き出した。

「今はいいわ。食べ物も持ってるから。それより珍珠海へはどうやって行くの?」

親父は裏山を指差して、あっちの方へ歩いていけば判るよと言った。

雨上がりの道は空気が美味しかった。この場所の地名ともなっている、宿の裏手にある沖古寺を見学させてもら

った後、林の中の山道をのんびりと登った。しばらく行くうちに林が途切れ、石がゴロゴロとした枯れ沢の流れ跡に沿う広場のような場所にでたが、立て看板一つ無く何処に珍珠海があるのかまるで判らない。

広場の回りを覆う低い灌木の茂みの中には道なのか動物の踏み跡か、大雨の増水時に流れた水の跡なのか判然としないような道筋がいく本も茂みの奥に向ってのびていた。気の向くままに適当な道筋をたどっていくと灌木が途切れてポッカーリと美しい場所にでた。

箱庭のようにこぢんまりと起伏のある地形には古い倒木や大きな岩を覆っている苔の上に可憐な野草が小さく伸び、まるでデザインされたように箱庭の中に配置されている。築山のような小高い丘の上には一本の大きな木が茂っていた。木の下に倒れている太くて乾いた倒木はまるでそこに訪れる者達のために用意されたベンチのようだ。

うわあ～、ムーミン谷みたいだあ～。

私と同じ世代の者なら誰もが知っている、北欧の作家トーベ・ヤンソンが描いた童話「ムーミン」の故郷がムーミン谷だ。読書好きだった子供時代から私はこのシリーズが大好きで、すっかり大人になった今までの間に何度図書館で借りたか判らない。個性的な登場人物や、穏やかさの中にほんのりと寂しさを感じさせるどこか風変わりなストーリーも魅力的だが、不思議とそれよりも印象深いのはまるで目の前に風景が浮かびあがってくるような、色鮮やかに細やかなムーミン谷の自然の情景描写だ。

・・・しっとりとした青い苔の柔らかさ、去年の落ち葉の茶色い敷物に木漏れ日の差し込む曲がりくねった小道、日の光で暖まった木の幹の感触……。子供時代から繰り返し読み返し、心にその風景を思い描くうち自分でも知らない間に出来上がっていたらしいムーミン谷の情景に、私は思いもかけず北欧とはかけ離れた中国奥地の山中で会ってしまったのだ。時折風が吹くたびに灌木の茂みがザワザワ揺れる他、辺りはまったく静かだった。小高い丘の木の下に座りゆっくり風景を味わうと、私は日溜りの中で目を閉じた。風が耳元でサワサワなっている。

ああ・・・ここが私の場所だったら・・・。もし私がこの土地で生まれたチベットの少女だったら・・・きっと時折、村を抜け出して一人でここに来るんだろう。一人でゆっくり物思いにふけったり、仲良しの友達とやってきて秘密の話をするのかも。そしてある時は村人に知れないようにこっそりと、ほのかに思いを寄せ合う男の子とやって来てこの倒木のベンチに座って長い時間話をするのかも・・・

三年前のあの時、花園に並んで座っていた少年と少女の姿が目裏に浮かんできた。この土地に生きるチベット族の少女達が羨ましい・・・。なんといったってこの土地は

ロマンチックな場所がありすぎる。小高い丘の日溜りで幸福な空想の世界に浸りながら私の心はすっかり乙女になっていた。

時折強く吹く風に震える木立がザワザワと鳴っていた。私は自分が何処にいるのか思い出すと再び珍珠海を探して歩き始めた。周りは私の背丈よりも高い灌木の茂みに遮られ、迷路の様に入り組んで続いている幅50cm程の小道?からは全く先の視界は利かない状態だ。

垂丁の中では名の通った景勝地の珍珠海が、こんなに判りづらい場所に在るはずは無いように思えた。きっとどこかで方向が違ってしまったのだ。だが私はこの何処へ通じているのか判らない迷路の探検が面白くなってきたところなので、行けるところまで進んでみたい気分になっていた。

見通しは悪いが両脇を高い山に挟まれた狭い谷底のこの土地で、道に迷う心配はなさそうだ。左手に聳えているのは、初日洛絨牛場に向かう道のりで眺めていた、鬼が島のように岩がゴツゴツと天に向かって角を振り立てている五百羅漢の岩山だ。戻る時にはこの岩山が右に見えるように茂みの中を歩いていけば自然に沖古寺の方向に出られる筈だった。

だが私は進むにつれて段々と、何故だか薄っすら恐くなってきてしまった。先程まで明るかった空は再び曇り空に変わり始め、進めば進むほどその場所から感じられる威圧感のようなものに身体を押さえつけられる気持ちになってくる。

不安と好奇心がせめぎ合う気持ちをなだめながら、それでも小道を進んでいくと突然目の前の灌木が切れ、目の前を枯れた沢が横切っている場所に出た。そして私の眼に飛び込んできたのは目の前に厚くつもっている砂山から立ち上がり、どこまでも聳え立つ巨大な岩盤の壁だった。見上げた岩盤の上部は厚い霧に包まれて見えてはいないが、岩盤の下部には崩れてきた岩や砂利や砂が積み重なり、それを伝って少しその岩盤をよじ登れば手で触れる事もできそうな高さにまで氷河が岩に齧り付いているのが霧の中から透けて見えていた。

金縛りにあったように暫く動けなかった。仙乃日だシェンナイリー・・・。厚い雲と霧に覆われた神山のほんの少し覗けている麓の岩盤さえ灌木の茂みに遮られ、私は知らず知らずのうちに土地の人々が神と崇める垂丁三大神山の最高峰が立ち上がる裾野のどん詰りまで真っ直ぐに歩いて来ていたのだった。

垂丁を訪れたのはこれで2度目だが、私はこれまで仙

乃日の姿を殆ど見たことがなかった。いつも厚い雲に覆われている霊峰は、はるか彼方に雲の割れ目からその頂きをチラッと覗かせている程度でしか眺めた事が無く、正確にどここの場所から聳え立っているのかもあまり良く判っていなかった。垂丁に到着した日にアーロン達と眺めた仙乃日の頂きは、もっとずっとずっと遠くにあるように感じられていたのに……。

何処からかザワザワと沢の流れるような音が聞こえてくる。山全体を包んでいる霧の中から岩肌を伝って氷河から流れ落ちる水がいく筋かの細い滝となって滑り落ち、山裾の砂に吸い込まれているのが見えた。私が立っているこの枯れ沢は垂丁の長い冬が終わりを告げ峰上の雪が融ける頃、流れ落ちた雪解け水の川になるのだろう。

頭上から聞き覚えのある、あの音が響いていた、ゴトツ……ゴゴゴゴ……

まるで遠雷のように低く轟く山の唸り声だ。神の山が私に向かって話しかけているような気がした。

ああ……神様……。

私は思わず頭を垂れ、神山に向かって祈りを捧げた。

(次号に続く)

苏州夜曲

作词：西条八十
作曲：服部良一

tóujūnhuáibào lǐ wúxiànchánmiányì
1. 投君怀抱里，无限缠绵意。

chuán gē sì chūnmèng liú yīng wǎnzhuǎn tí
船歌似春梦，流莺婉转啼。

shuǐxiāng sūzhōu huā luò chūn qù
水乡苏州，花落春去。

xī xiāngsī cháng dī xì liǔ yī yī
惜相思长堤，细柳依依。

luòhuā shùn shuǐliú liúshuǐ cháng yōuyōu
2. 落花顺水流，流水长悠悠。

míng rì piāo hé chù wèn jūn huán zhī fǒu
明日飘何处，问君还知否。

dào yǐng shuāng yǐng bàn xǐ bàn xiū
倒影双影，半喜半羞。

yuàn yǔ jūn rè qíng yǒng cún cháng liú
愿与君热情，永存长留

〔中秋節の思い出〕

何媛媛

中国には伝統的な祭りが、殆ど毎月あります。旧暦8月の祭りと言えば「中秋節」で、中国の人たちに最も大切にされている祭りの一つです。

中秋節は八月十五夜の満月の夜の祭りですが、私の頭に浮かぶ風景は、庭の丸いテーブルの上に線香を立てた香炉が置かれ、手作りの月餅、色々な果物を供えた景色です。しかし、この風景は私の幼い頃、私のお祖母さんの家の中秋節の風景で、今はほとんど見られなくなりました。

その頃は今程豊かではなく、お百姓さんの生活も今より貧しい時代でした。それでも、人々は伝統的な祭りを重んじて、知恵を精一杯絞り、祭りを楽しく過ごす工夫をしました。この日に欠かせない月餅は、全部、私のお祖母さんが手づくりで作りました。小麦粉に黒砂糖や、胡麻油を混ぜてじっくり捏ね、木で作った様々な型に入れます。形が出来ると、囲炉裏に入れてゆっくりと焼きます。もう少し贅沢なものは、金木犀の花と蜂蜜で作った餡の入った月餅です。果物等は、田舎の親戚から送られてきました。棗、山楂子、葡萄、トウモロコシ、枝豆、リンゴなどいろいろあります。

日が暮れ、金色の真ん丸いお月様がだんだん上ってくると、皆はテーブルを囲み、一家団欒の夜が始まります。お祖父さんが謹んで線香に火を点すと、皆は手を合わせ

てお月様にお辞儀をし、家族の健康、平安、親睦を祈ります。

満月へのお祈りが終わると、大人達は子供たちに食べ物配ります。どれも年に一度食べられる珍しい食べ物です。誰もすぐには食べないで秘密の場所に隠したりします。何日間も楽しんで食べるつもりなのです。ですから、自分のを食べずに、他の子のを盗んで食べるずるい子が現れたり喧嘩が始まったりしました。

八月十五夜の月は、一年中で一番大きい、一番丸い月だといわれています。その月の下で、何よりも美味しく思われる月餅を食べながら、お祖母さんからお月様に関する物語を聞いたりします。毎年、殆ど同じような「嫦娥」（月に住むという女神）や「玉兔」や「桂樹」の話ですが、いつも初めて聞くように、興味津々と聞きました。

中秋の頃は収穫の季節です。中秋節はこの豊かな季節の恵みを受ける祭りでもあるといえます。社会が高度発展を遂げた今日、スーパーでは高級な月餅、果物などを手に入れることが出来、テレビでは多彩な番組を何時でも見ることができます。けれども、子供時代の、お祖母さんの手づくり美味しい月餅やお月様に関する古い物語は、私にとって永遠の懐かしい思い出です。

*この文章は2005年9月号「わんりい」に掲載されたものです。

【‘わんりい’ 活動報告】

何媛媛さんと一緒に月餅と中国家庭料理を作って ‘わんりい’ メンバーが交流

「手作り月餅の会」 2009年9月20日於：三輪センター



‘わんりい’ の会報に、中国に伝わるいろいろな楽しいお話を書いてくださっていらっしゃる何媛媛さんと ‘わんりい’ メンバー 16名が、町田の地域センター・三輪センターに集い、何さんのご指導で一緒に月餅や中国の家庭料理を作って交流しました。小豆餡、ナッツ餡、南瓜やサツマイモ餡の4種類の月餅、ぽんぽんと型抜きを賑やかに響かせて、なんと90個あまりも成型して焼き上げました。

その間に、簡単で美味しい中国の家庭料理が盛り沢山に次々テーブルに並べられ、いつもの交流会のように和気藹々と話を弾ませて頂いたのと言うまでもありません。

お昼のメニューは、クレープ状に薄く焼いた小麦の餅に肉味噌、春雨とモヤシの和え物、卵とシシトウの炒め物を包んでいただく中国式クレープ料理、ジャージャー麺、胡瓜やナスの中華風サラダ、そしてほのかに甘い大ナツメ入り緑豆のデザートでした。いずれ ‘わんりい’ のHPに掲載したいと思っています。

ところで皆さんは、月餅を手作りできると思っていたらっしゃいましたか。

中国の中秋節には、少し前まで手作りされていたようですが、高級感を漂わす色艶・形そして味わいに、とても手作りは難しいと思っていました。ところが昨年9月、山西省の旅の途中の村で村人達が集まって一緒に月餅作りをしているところに出会いました。

月餅の模様を彫った木の型に、月餅の種を押し込んで、ぽんと抜いては並べ、石炭を真っ赤に燃やしたカマドの様なオーブンで焼き上げてました。ナッツのぎっしり詰まった焼きたての月餅のなんて香ばしくて美味しかったことでしょう！月餅は自分で焼けるんだ、と初めて知りました。

月餅の型が欲しい！と、月餅作りをしていた村の人に、型はどこで買えるんですか、買えるという市はいつ立つん

ですか、いくらくらいですかとか、いかにも欲しそうな顔で矢継ぎ早に質問したせいでしょ。油のしっかりしみこんだ木型を一つ、「あげるよ」と手に持たせてくれました。



手作りされた月餅の山

見ている限りでははとも簡単そうでしたが、さてとなると月餅の皮はどんな材料が如何様に配分されているのでしょうか。

今年6月、「燕麦と茴香の水餃子」交流会開催の折、お客さんで参加くださった何さんに、月餅を作りたいと相談しましたら、二つ返事で引き受けてくださいました。

実は何さんもこれまで月餅を作られたことはなかったとのこと。研究熱心なお人柄で、この夏、試行錯誤を繰り返して挑戦され、

簡単で、初めての挑戦でも失敗しない、美味しい月餅のレシピを作ってくださいました。

手作り月餅の良さは、自分の好みの餡でオリジナリティを出せることです。型はなくとも、ゼリー型やカップケーキの型で作れますよ。今年の中秋節は10月3日です。是非、挑戦してみてください。

(報告：田井)

▶レシピ、16ページに掲載しました。

‘わんりい’ おたより会員の皆様、そして入会をご希望される皆様へ

毎年4月から新年度になります。途中入会は、入会月によっては割引があります。詳細は事務局にお問合せを。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

▲入会はいつでも歓迎しています。

▲入会すると‘わんりい’の全ての活動に参加できます。

活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に‘わんりい’の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

媛媛風味的月餅の作り方

👉 皮の作り方

材料: 月餅 13個 (直径5cm ≒ 50gの月餅、13個分)
薄力小麦粉 180g、オリゴ糖 80ml、サラダ油 40ml
塩 3g、カン水 20ml (カンの粉 3gに水を入れて20mlにしたもの。カンの粉が手に入らないときは重曹またはベーキングパウダーで代用)

👉 餡の作り方

準備: 300gぐらいの小麦粉を弱火で炒めて置く。この小麦粉は、月餅の全ての餡に利用。黄な粉でも良い。

① 小豆餡

▲ 320gの粒餡又はこし餡に30gの上記の炒めた粉を入れ油を少々とあれば桂花油で香をつけ、13個(約28g)の団子を作る。

② サツマイモ餡、かぼちゃ餡

材料: サツマイモ(大) 3本、かぼちゃ 400g
▲ 適当の大きさに切って蒸し、箸が通るようになったら火を止め、ボールに入れて細かく潰す。
▲ 上記に20gの炒めた粉を入れ、油を少々と、好みで砂糖を加え、13個(約28g)の団子を作る。(砂糖は入れなくとも良い。また、レーズンなどを入れてもよい)

③ 木の実の餡

材料: ピーナツ 20g、松の実 20g、南瓜の実 20g、ヒマワリの実 20g、くるみの実 20g、胡麻 20g、砂糖 50g 炒めた粉 20g、油、適量
▲ 木の実を細かく砕いて鍋に入れ弱火を掛け、油、砂糖を入れて炒める。
▲ 香りが出たら、火を止め、粉を入れ、油を少しずつ入

れ混ぜ、纏められるようになったら、13個(約28g)の団子を作る。

👉 月餅の成型

- ▲ 皮の生地を13個(1個分、約25gで丸いだんこに纏める。
- ▲ 上記を5mm程度の厚さに伸ばし、用意の丸い餡を真ん中に置いて、手のひらに乗せ餡を軽く押しながら右手の親指と薬指で少しずつ皮を絞って口を閉じ、最後に余った生地を取り去り団子状にする。
- ▲ 両手に粉を付けて、丸く出来た団子状月餅に均一に馴染ませるようによくすり込む。型にも粉を少々を振り掛け、叩いて余分の粉を払う。
- ▲ 月餅材料を型に入れ、花模様が浮き出るようにしっかりだんこを押しつける。
- ▲ 型を上下左右にまな板に叩いて型から抜く。以上のようにして生地に餡を包んでゆく。(木の型が無い時は、ケーキやゼリーを作る型でもよい)

👉 月餅の焼き方

- 準備:** 全卵1個と黄身1個分をよく混ぜて置く。オーブンを200℃予熱する。
- ▲ 月餅をトレーに置き、卵の汁を料理刷毛で塗って、200℃で10分焼く。
 - ▲ 10分経過後、トレーを取り出し、更に卵汁を月餅の表面に塗りもう一度200℃で10分焼く。
 - ▲ 10分経過後、月餅を取り出し、竹の箶に乗せて冷ます。
 - ▲ 完全に冷めたら通風性のある閉容器に入れて、2～3日置いて、油が良く廻り、色も濃くなった後食べると美味しい。

《'わんりい' 掲示板》

全員集合!! 第12回 町田発国際ボランティア祭 2009 夢広場

この星に平和と希望を

11月1日(日) 10:00～16:00 於:まちな駅「ぼっぼ町田」イベント広場

国際支援と友好活動をしている町田市と町田市周辺のボランティア団体が集結! エスニック料理いっぱい! 民族芸能いっぱい! そして、エスニックグッズもいっぱいのお縁日! 世界を体中で味わおう!

'わんりい'の会は、炭火でジワリと焼いた香ばしい、遊牧民風味のエスニック焼鶏を販売します。ご都合つく皆さん、是非お出掛けして焼きたてを賞味してください!!



- 主催: 2009 夢広場実行委員会 <http://www.yumehiroba.jp/2009-PR.pdf>
- 共催: (財)町田市文化・国際交流財団 <http://www.machida-kokusai.jp/>
- 問合せ: Tel 042-722-4260 町田国際交流センター

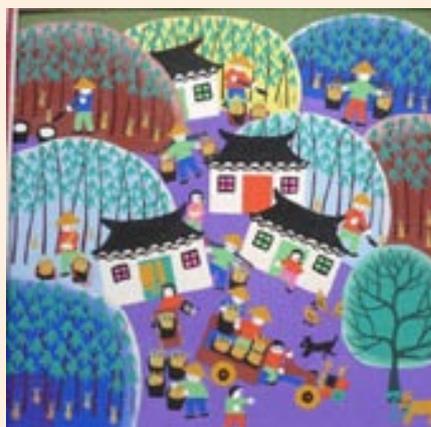
'わんりい'の催し **あまり知られていない中国の、素敵な素顔が見える！**
土の香り溢れる民間芸術 「中国農民画」 ～スライドとお話の会～

1枚1枚、手描きした中国農民画絵には農民達の夢や希望、生活や行事などが色鮮やかに表現されてとても魅力的です。豊富なスライドや実際の作品で楽しむ中国農民画の魅力がいっぱい！

於：町田市民フォーラム
 2009年10月12日(祭) 14:00～16:00

参加費：無料 定員：30名(先着)
 お話：平野理絵(日本/中国農民画協会代表)
 主催：日中文化交流市民サークル'わんりい'
 協力：日本農民画協会
<http://nouminga.web.fc2.com/>

問合せ：☎042-734-5100'わんりい'
 E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp



横浜開港150周年・特別企画シルクロードの旋律を奏でる
二胡・中国琵琶・揚琴アンサンブル

http://pds.exblog.jp/pds/1/200909%2F02%2F02%2Fe0181602_213055.jpg

於：横浜市岩間市民プラザ・4Fホール
<http://www.yaf.or.jp/facilities/iwama/>

*相鉄線(各駅停車)「天王町」駅下車徒歩2分 駐車場なし
 2009年11月8日(日) 14:00開演(13:30開場)

- 出演：曹雪晶(二胡)、成燕娟(揚琴)、
 ウェイウェイ(中国琵琶)
- 参加費：2000円(全席指定)
- 予定演目：喜太郎「シルクロード」、坂本龍一「ラストエンペラー」、「兄回来了」、「節日の天山」、「花好月圓」など
- チケット：岩間市民プラザ窓口(10:00～21:00)
 ☎045-337-0011

主催：横浜市岩間市民プラザ
 後援：横浜市市民活力推進局、神奈川新聞社 他

講演会『**ヴェトナム新時代**』

～深まる日本との関係～ 無料

2009年10月15日(木) 18:30～20:30(開場18:00～)
 於：町田市民フォーラム3Fホール(定員180名)

- 講師：坪井善明(つばいよしはる)氏
 早稲田大学政治経済学術院教授
- 著書 『近代ヴェトナム政治社会史』(東京大学出版会)
 『ヴェトナム「豊かさ」への夜明け』(岩波新書)
 『ヴェトナム現代政治』(東京大学出版会)
 『ヴェトナム新時代―「豊かさ」への模索』等

- 主催：(財)町田市文化・国際交流財団
 町田国際交流センター(担当：国際理解部会)
- 申込み：住所、氏名、参加人数と電話番号を書いて
 10月5日までに町田国際交流センターへFAXを。
 FAX番号042-722-5330

恒例 龍谷寺コンサート ～**観月の夕べ2009**～

<http://www.ryukokuji.or.jp/kangetu.html>

2009年10月12日(月) 18:00開演(開場17:30)
 姜小青(古箏)、王霄峰(二胡)、馬平(中国木琴・打楽器)

於：曹洞宗・龍谷寺本堂 <http://www.ryukokuji.or.jp/>

JR八高線・北八王子駅徒歩15分 八王子市大谷町670
 料金：2,000円 問合せ：龍谷寺 0426-42-8108

MAX遊弦コンサート2009

シュウミン(二胡) vs 鷹野雅史(Eit)

～ハイテク楽器「STAGEA」と孤高の「二胡」～

会場：東京芸術センター 21F「天空劇場」 <http://www.art-center.jp/tokyo/>
 * 足立区千住1-4-1 北千住駅西口徒歩7分

2009年10月17日(土) 17:00開演(16:00開場)

参加費：4,000円(当日4,500円 全席指定)

予定曲目：「平湖秋月」、「草原メドレー」、「マンダラ」
 プッチーニ「誰も寝てはならぬ」他

チケット：03-5681-0482/SAA <http://www.xiumin.com/>

電子チケットぴあ：<http://ent.pia.jp/pia/event.do?eventCd=0928011&perfCd=001>

▶ **アフリカンコネクションのスワヒリ語教室** ◀

簡単な文法を使っておしゃべりをしませんか？

橋本公民館・小会議室 (JR横浜線・橋本駅北口・1分)
 相模原市橋本6-2-1 [シティプラザはしもと]内
<http://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/shisetsu/kouminkan/005889.html>

2009年10月29日(木) 19:30～20:30

参加費：1000円 アフリカン紅茶付き

詳細：お問合せください。

☎：090-6478-3441(竹田)

第7回留学生トークプラザ

留学生は日本をどう見ているか

町田市立中央図書館・6Fホール
 2009年11月8日(日) 14:00～17:00

問合せ：町田国際交流センター

☎042-722-4260

《'わんりい' 掲示板》

日中友好会館・第19回中国文化の日 <http://www.jcfc.or.jp/event/konngeki.html>
京劇の花梅蘭芳～美しき伝説のスター、華やかな軌跡～

- **展覧会**：会場＝日中友好会館美術館
 2009年9月29日(火)～10月26日(月) 10:00～17:00
 24日・25日は21:00まで開館(水曜休館入場無料)
- **シンポジウム**(申込み受付終了しました)
- **昆劇公演**：会場＝日中友好会館大ホール *チケットは全て完売いたしました。
 演目＝「牡丹亭・遊園驚夢」「醉打山門」「擋馬」
 10月24日(土) 15:00/19:00、10月25日(日) 15:00
 10月26日(月) 19:00 開場30分前 全回約60分
 出演：湖南省昆劇団 座席指定 *当日券や立ち見席もございません



主催：(財)日中友好会館、中国对外文化交流協会、梅蘭芳記念館
 協力：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、早稲田大学図書館他／後援：中国大使館、社団法人日中友好協会他

【お問合せ】財団法人日中友好会館文化事業部 ☎03-3815-5085 〒112-0004 東京都文京区後楽1-5-3

中華人民共和国建国60周年記念公演張紹成演出・主演 **北京より招聘「京劇」** / 4公演

A 張紹成&ユネスコ世界無形文化遺産 北方昆曲劇院・他

西遊記より「**三打白骨精**」
 川崎市民プラザ開館30周年記念事業
 於：川崎市民プラザ／高津区新作1-19-1
 2009年11月8日(日)
 14:00～(開場13:30)
 全席自由席 5,000円

- 'わんりい'を通して申し込まれた方はどなたでも、川崎市民・(張紹成)友の会会員らと共に、入場料5000円のところ前売り特別価格3,500円になります。名前、住所、電話番号と枚数を、'わんりい'事務局までお知らせください。

▲ E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp
 ▲ Fax: 042-734-5100

B 張紹成&ユネスコ世界無形文化遺産 北方昆曲劇院・他

西遊記より「**三打白骨精**」(付:歌謡ショウ)
 於：相模原市民会館
 相模原市中央3-13-15
 2009年11月5日(木)
 14:00(開場13:30)
 *京劇は、15:30開演です。
 SS席 4,500円/S席 3,500円/自由席 2,000円

C 秘技「変面」、「三岔口」、「孫悟空」(京劇解説付き)

於：セシオン杉並 杉並区梅里1-22-32
 2009年11月4日(水) 15:00～(開場:14:30)
 5,000円(小学生以下3,500円)/全席自由

D 講談がナビゲーター

張紹成&神田紅による三国志
「長坂坡・漢津口」
 出演：張紹成 殷秋瑞 他
 於：セシオン杉並 杉並区梅里1-22-32
 2009年11月4日(水) 19:00～
 (開場18:30)
 5,000円/全席自由

- B公演、C公演、D公演につきましては、'わんりい'を見たとき書添えて、名前、住所、電話番号と枚数を直接(株)CSC企画・Fax048-477-6967へお申込みください。B公演4500円→4000円 C、D公演が4500円になります。



● **全ての問合せ：**
(株)CSC企画 ☎048-477-6961
<http://www.csc-kikaku.jp/news/index.html>

中華人民共和国建国60周年記念事業新潮劇院「京劇」

- ▲ 見ごたえ抜群の大立ち回り! **張飛と馬超** / ▲ 暗闇でドッキリ! **三岔口**
- ▲ 全編日本語京劇! **双背凳**

於：曳舟文化センター ホール(京成線・京成曳舟駅より1分、東武線・曳舟駅より3分)
http://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/tamokuteki/hikibunec/index.html
 2009年10月10日(土) 18:00～
 S席:5,000円 A席:4,500円(高校生以下、2,000円)
 *墨田区民は各500円引 *当日券は各500円増

主催：新潮劇院/後援：中国大使館文化部・墨田区 問合せ：☎03-3484-6248(新潮劇院)

出演：張春祥、馬征宏、殷秋瑞、侯偉、張冠玉、于躍チャン・チンホイ、張皎月、張烏梅、他
 楽師：洪鋼、金虹、許佳 他

